

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第4集

岩村田遺跡群

SHIN MACHI
新 町 II

長野県佐久市岩村田新町遺跡発掘調査報告書

1987

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

例 言

- 1 本書は、長野県佐久市建設事務所による都市計画街路事業御代田佐久線改良工事に伴う、岩村田遺跡群新町遺跡の第二次発掘調査報告書である。
- 2 調査委託者 長野県佐久市建設事務所
- 3 調査受託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター
- 4 発掘調査対象地番
佐久市大字岩村田字新町839, 840, 860-2, 861-3, 861-6, 867-2, 870,
871-1, 874, 890-1, 889, 888-1・2,
- 5 調査期間及び 昭和61年5月26日～6月9日, 11月4・5日(発掘調査)
対象面積 昭和61年6月10日～昭和61年12月10日(整理調査) 614.4㎡
- 6 調査団の構成
事務局 佐久埋蔵文化財調査センター
所 長 西沢 正巳
庶務係主任 畠山 俊彦
庶 務 係 高橋 純子
調査団
団 長 黒岩 忠男(佐久考古学会副会長)
調査指導者 林 幸彦(佐久市教育委員会)
羽毛田卓也()
調査担当者 小山 岳夫(佐久埋蔵文化財調査センター調査係)
調査 主任 三石 宗一(同 上)
発掘協力者 浅沼ノブ江, 井出みずは, 内藤治伸, 森泉好治(佐久考古学会員)
(五十音順) 和久井義雄(佐久考古学会員)
整理協力者 宮川百合子
地形地質指導 白倉盛男(佐久考古学会副会長)
- 7 本書の原稿執筆、編集は小山が行った。尚、遺跡の環境については、昨年刊行の第1次調査の報告書で詳述されているため、本書では省略した。
- 8 本書で使用した写真は遺構については小山岳夫、遺物については畠山俊彦が撮影したものを
使用した。

9 本調査に関する資料はすべて佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査において、倉島祐氏、小林保一氏、工藤秀一氏、小田川芳男氏の他、地元の方々に数々のご協力、援助をいただきました。記して感謝申し上げます。

また、報告書作成にあたり、下記の各氏より多大なご指導、ご助言をいただきました。厚くお礼申し上げます。

臼田武正、堤 隆、花岡 弘、福島邦男（敬称略五十音順）

凡 例

- 1 本書は、事業年度等の関係から限定された期間内での迅速な刊行を基本編集方針とし、調査により検出された遺構・遺物の資料をできるだけ多く図化し、また、最大限わかりやすく記録することに努めて作成した。
- 2 遺構の記述については、検出位置→検出層序→重複関係→平面形態→覆土→付属施設→遺物の出土状況→その他の観察事項の順に記載することを原則とした。
- 3 遺構の略称
溝状遺構→M 土坑→D 柱穴列→P
- 4 水糸レベルについては、各遺構毎に統一し、標高は縮尺尺度の上に明記した。
- 5 挿 図
 - 1) 縮 尺
溝状遺構→ $1/120$ 土坑→ $1/60$ 柱穴列→ $1/60$
土器→ $1/4$ 石製品・鉄製品→ $1/2$ 貨幣→ $1/1$
 - 2) 遺構に用いたスクリーン（斜線のもの）は地山をあらわす。

目 次

例 言

凡 例

第I章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る動機…………… 1

第2節 調査日誌…………… 2

第II章 基本層序及び概要

第1節 基本層序…………… 3

第2節 検出遺構・遺物の概要…………… 3

第III章 遺構と遺物

第1節 溝状遺構…………… 6

1) 第1号溝状遺構…………… 6

第2節 土坑…………… 7

1) 第1号土坑…………… 7 2) 第2号土坑…………… 7 3) 第3号土坑…………… 7

第3節 柱穴列

1) 第1号柱穴列…………… 8

第4節 新町遺跡出土遺物…………… 9

第IV章 調査のまとめ …………… 10

挿 図 目 次

第1図 新町遺跡位置図 1 第5図 第1号溝状遺構実測図 6

第2図 新町遺跡基本層序模式図 3 第6図 第1～3号土坑実測図 7

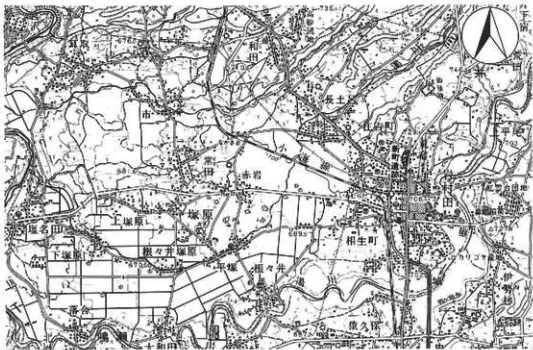
第3図 発掘区設定図 4 第7図 第1号柱穴列実測図 8

第4図 新町遺跡全体図 5 第8図 新町遺跡出土遺物実測図 9

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至る動機

新町遺跡は、佐久市北部にみられる特異な「田切り」地形が微高地に変化する岩村田市街地を中心とした岩村田遺跡群の北西端に位置している。佐久市遺跡詳細分布調査、数ヶ所の発掘調査によって弥生・古墳・奈良・平安・鎌倉・室町・戦国時代にかけての大複合遺跡群であることが知られている。佐久建設事務所より、昭和60年度岩村田地籍都市計画街路事業・御代田佐久線改良工事が本遺跡内において実施されるため、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となり、緊急に発掘調査し、記録保存する必要性が生じた。昭和60年には佐久建設事務所より委託を受けた佐久市教育委員会によって第1次の発掘調査が行われ、弥生・古墳時代の遺物、中世以前の遺構・遺物が検出され、近隣の大井城址との関連も含め本遺跡が歴史的に重要な位置を占めることが再認識された。本年の調査は、前年度に引き続く第2次調査にあたり、昭和60年度発掘調査地区の更に北部地点を佐久市教育委員会より委託を受けた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施することとなった。



第1図 新町遺跡位置図 (1 : 50,000 国土地理院地形図による)

第2節 調査日誌

本調査は、道路拡幅工事に伴う調査であるため、調査対象地区の巾が約4m弱という極限られた範囲での調査となった。また、住宅地に近接するため、生活道路の確保が義務づけられ、調査区が更に小単位に分断されることとなった。このため、最北地区を便宜的に第1地区とし、以下南へ向って第2・3・4・5・6・7地区として地区毎に調査を行うこととした。

尚、第2地区は、用地未買収のため、今回の調査委託には含まれていない。また、第5地区の一部、第6・7地区については隣接の地権者の都合等により、6月段階での調査ができず、後日立ち合い調査を行うことになった。

5月26・27日（月・火）

市教委、佐久建設事務所、佐久埋文センターの三者により現地打ち合わせを行う。

器材搬入、テント設営等の準備を行う。

5月28日（水）

重機にて表土除去作業を開始する。

5月29日（木）

調査団結成式及び地鎮祭を行う。重機による表土除去作業継続。第1地区より精査を開始する。

5月31日（土）～6月3日（火）

重機による表土除去作業（第2～5地区まで）を行う。

第1～第5地区のプラン確認作業を行う。第4地区より検出された溝状遺構（M1）の掘り下げを行う。第3地区は黒色土の堆積が厚く、トレンチ調査によって遺構及び層序確認を行う。レベル原点移動 BM1 722.7m・BM2 721.4m

6月4日（水）～6月7日（土）

M1及び第1地区より検出されたD1～3、第V地区より検出された第1号柱穴列の掘り下げ、セクション図、エレベーション図、平面図の作成および写真撮影を行う。

6月7日、全体図作成、全体写真撮影を行い、第1・3・4・5地区の調査終了。

6月9日（月）

器材徴収。市教委立ち合いのもとに埋めもどしを行う。

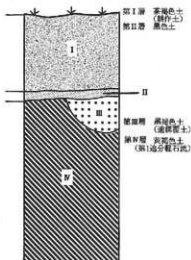
11月4・5日（火・水） 第7地区の立ち合い調査を行う。遺構・遺物は確認されなかった。

第6地区は未調査のまま工事を着工していた。

6月10日（火）～12月10日（水） 報告書作成作業を行い、全調査を完了する。

第II章 基本層序及び概要

第1節 基本層序



第2図 新町遺跡基本層序模式図
(第1地区より)

新町遺跡の本年度調査地区は第1地区(北端)から、第5地区(南端)までの比高差は現況地形で約2.35mを測り、北から南へ向って緩い平坦な傾斜面を形成している。第1追分軽石流(P1)を基盤とした旧地形は、現況地形に比べ複雑な様相を示す。調査区のほぼ中間地点にあたる第3地区は、耕作土と黒色土が厚く堆積する凹地形を形成しているのに対し、第1・4・5地区では黒色土(第II層)の堆積が浅く、地表面から30~50cmの深さで、第1追分軽石流を基盤とした黄褐色土層(第IV層)に至る。遺構の分布は、黒色土(第II層)の堆積の薄い第1・4・5地区に限られ、凹地形の第3地区にはみられない。尚、遺構の確認は、大方が黄褐色土(全体層序第IV層)上において行われた。

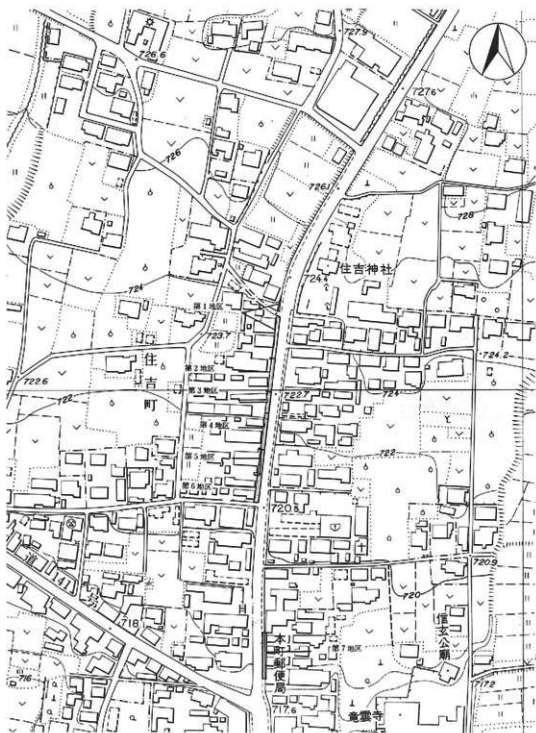
第2節 検出遺構・遺物の概要

遺構

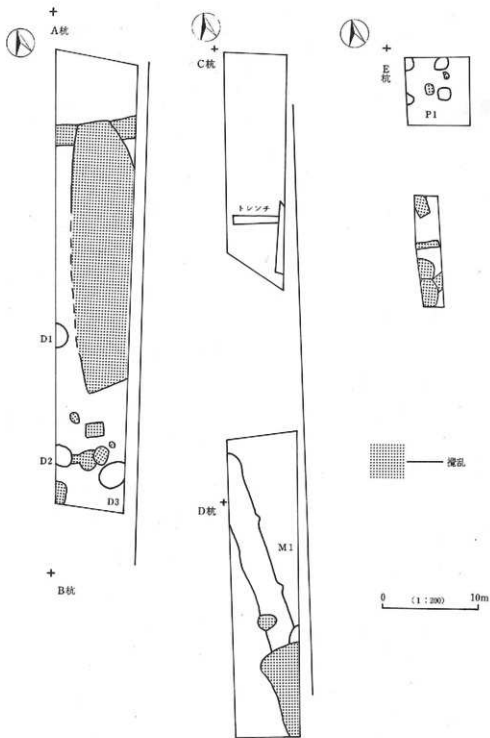
| | | | |
|------|------------|------|----------------|
| 第1地区 | 土坑3基(D1~3) | 第5地区 | 柱穴列1基(P1) |
| 第3地区 | 低地のため遺構なし | 第6地区 | 未調査で破壊 |
| 第4地区 | 溝状遺構1基(M1) | 第7地区 | 立ち合い調査 遺構・遺物なし |

遺物

| | | |
|----|---------------|----------|
| 土器 | 弥生土器……甕 | 石製品……紡錘車 |
| | 土師器……甕 | 貨幣……寛永通宝 |
| | 土師質土器……蓋、内耳土鍋 | 鉄製品……鋤 |
| | 陶磁器……碗(天目茶碗等) | |



第3図 新町遺跡の地形及び発掘区設定図(1:2,500佐久市基本図9による)



第4圖 新町遺跡遺構全体圖

第三章 遺構と遺物

第1節 溝状遺構

1) 第1号溝状遺構

遺構 (第5図, 図版二の1)

本遺構は、本調査における第4地区の全体層序第IV層、黄褐色火山灰層上において検出された。

他遺構との重複関係はもたないが、敷箇所を現代の構造物によって破壊されている。

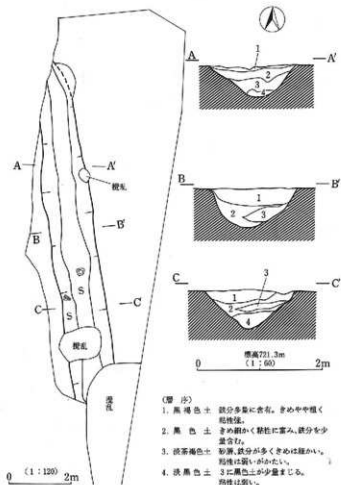
検出長10m72cm、巾110~152cm、深さ40cm内外を計測する断面形が緩い「U」字状を呈するは南北に縦走する溝で、地形と同様に北から南へ向って徐々にレベルを低下させている。

覆土は4層からなる。第1層は鉄分を含む黒褐色土、第2層はきめの細かい黒褐色土、第3層は鉄分を多量に含む砂層、第4層は第3層と黒色土がまじる。

第3層のあり方から水の流れたことが想定できる。

遺物

本遺構からは土師器片が出土している。いずれも細片で図化はできないが、器肉が厚く、ヘラケズリ調整が明瞭に施される甕片がみられることから古墳時代後期の遺物が主体を占めるものと考えられる。従って本遺構の廃絶もそれ以降に行われたと考えられる。



第5図 第1号溝状遺構実測図

第2節 土 坑

土坑はすべて第1地区の全体層序第IV層黄褐色火山灰層上から検出され、性格は不明である。

1) 第1号土坑(第6図, 図版一の4)

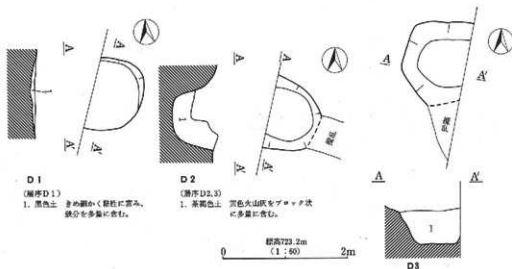
第1地区の西端中央より検出され、西側の一部は調査対象区外のため、未調査である。このため、全体の形状は明らかでないが、径116cm前後の円形を呈しているものと考えられる。確認面からの掘り込みは最深部で7cmを測るのみで、極めて浅く、土坑断面の形状は皿状を呈している。覆土はきめの細かい鉄分を含む黒色土1層のみからなる。遺物は皆無であった。

2) 第2号土坑(第6図, 図版一の5)

第1地区の西端、南寄りから検出され、西側の一部は調査対象区外のため、未調査である。このため、全体形状は不明であるが、短軸110cmの楕円形を呈していたと考えられる。確認面からの掘り込みは最深部で66cmを測り、断面は逆台形状を呈する。覆土は黄色火山灰をブロック状に多量に含む茶褐色土1層のみで構成され、人為的である。遺物は未検出であった。

3) 第3号土坑(第6図, 図版一の6)

第1地区の東端南寄りから検出され、東側一部は調査区外のため未調査である。このため全体形状は不明だが、径132cm前後の円形を呈していたと推定される。深さは54cmを測り、断面は逆台形を呈する。覆土はD2と同様で人為的であり、遺物は検出されなかった。

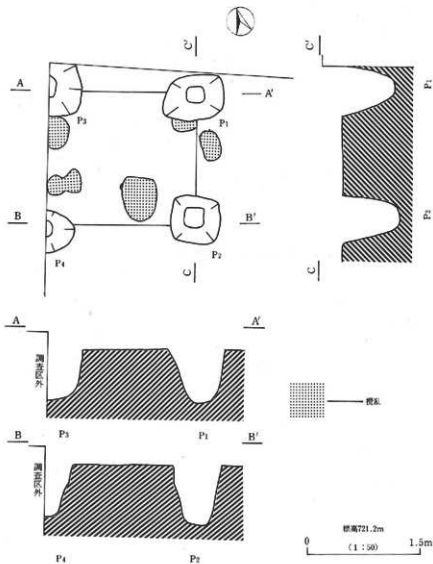


第6図 第1～3号土坑実測図

第3節 柱穴列

1) 第1号柱穴列 (第7図, 図版二の2)

本遺構は第5地区の黄褐色火山灰層上より検出された。柱穴4個のみの検出に留まったが、更に北側、西側の未調査区へ続く、相当規模の建物址になることが想定される。南北軸はN-16°-Eをさしている。柱穴の掘り方は一辺60~70cmの方形を呈し、深さはいずれも60~70cmを測る。遺物が出土していないため、時期判定は困難であるが、近世~近代のものと考えられる。

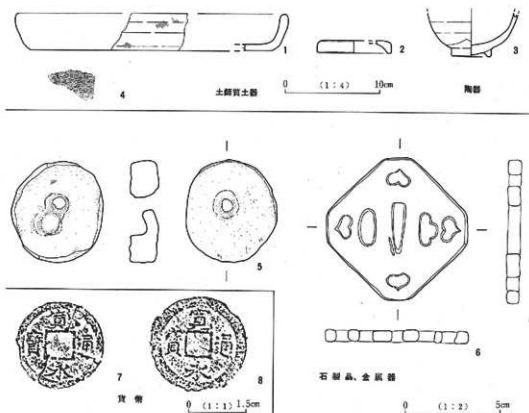


第7図 第1号柱穴列実測図

第4節 新町遺跡出土遺物 (第8図, 図版二の4~9)

新町遺跡からは弥生土器、土師器、土師質土器、中・近世以降の陶磁器の他、石製品、鉄製品が出土している。以上、図化した遺物を中心として説明を加えたい。

図化した遺物はいずれも各地区の耕作土内一括遺物、および表採遺物であり、遺構内から検出されたものはない。第8図1~3は、中・近世以降に所産が求められる。1は焙烙の破片で推定口径28.8cm、器高4.2cmを測る。表採遺物である。2は素焼の蓋と考えられる破片で推定口径7.8cm、器高1.3cmを測る。第1地区耕作土中より出土している。3は貼付による高台部位が4.2cmを測る船釉が施釉される陶器で、第2地区耕作土中より出土している。8-4は、弥生土器の甕の破片で楕円波状文が施される。第5地区耕作土中より検出されている。8-5は軽石製の紡錘車と考えられる石製品で、第4地区第1号溝状遺構の攪乱層内より出土している。8-6は、菱形を呈する刀の鐔で第1地区耕作土中より出土している。8-7・8は寛永通宝で、7が第1地区、8が第4地区より出土している。この他図化はできなかったが第1号溝状遺構内からは古墳時代後期と考えられる甕の破片が少量出土している。



第8図 新町遺跡出土遺物実測図

第IV章 調査のまとめ

今回、新町遺跡において検出された遺構・遺物の詳細は前述した。検出された遺構は、溝状遺構1基、土坑3基、柱穴列1基である。

一方出土遺物は、弥生土器、土師器、土師質土器、中・近世以降の陶磁器、石製品、鉄製品などである。

以下、昨年行われた、第1次調査の結果もふまえ、まとめを行いたい。

遺構

今回の調査で検出された遺構は、明瞭に時期判定できるものがなく、僅かに、第1号溝状遺構のみが、古墳時代後期の土器のみを純粋に包蔵していたことから、古墳時代後期以降に廃絶されたことが想定できる。M1が、北・南の両方向へ更に長く伸びることは自明であり、また、覆土の堆積状況から、水の流れがあった可能性も看取されることを勘案すると、この溝が往時に如何なる機能を持ち、人々の生活に役立っていたか興味深い。今後、近隣の調査によって、M1の存在は極めて重要な位置を占めてくることも十分に考えられる。

この他、土坑(D1~D3)、柱穴列(P1)については、時期判定ができる材料に乏しく、本調査において明瞭な位置を与えることはできない。但し、本遺跡の近隣は、中山道の街道筋にあたり、本調査で検出された土坑、柱穴列が近世に生きた庶民の暮らしと有機的に結びつく可能性も十分に考えられる。この点についても今後の近隣の調査によって明らかとなるであろう。

遺物

本調査で得られた遺物の内容は、昨年行われた第1次調査の遺物の内容とおおむね一致する。

弥生時代の土器は今調査では第5地区から1片出土したのみである。櫛掻波状文をもつ甕片のため、後期の所産と考えられ、第1次調査出土品と時代性は一致する。弥生土器が本調査地区でも南側の地区に偏在していたことは、該期の遺構が今調査の第5地区を含めた、遺跡の南半部に集中して存在する可能性が看取できる。これは古墳時代の遺構についても同様なことが言えよう。次に中・近世以降の遺物は、第1・2次調査を合せた、本遺跡の全体に分布する傾向が看取される。この事象は第1次調査の報告でも指摘されているように、本遺跡の東方300mにある大井城址との関連をあらためて想起させるものである。

以上、本調査のまとめを記したが、残念なことは、第6地区が未調査のまま破壊されたことであり、今後二度とこのようなことがあってはならない。



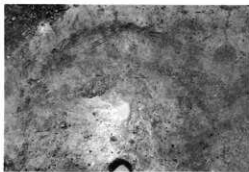
1. 新町遺跡近景(南方より)



2. 第1地区(北方より)



3. 第1地区(南方より)



4. 第1号土坑



5. 第2号土坑



6. 第3号土坑



7. 第3地区(南方より)

4～6は第1地区より検出

7は、黒色土壌遺跡



1. 第1号溝状遺構(北方より)



2. 第1号柱穴列(北方より)



3. 第7地区(立ち合い)



4. 新町遺跡出土土師質土器

8-1



5. 新町遺跡出土陶器

8-3



6. 新町遺跡出土石製品

8-5



7. 新町遺跡出土石製品

8-5



8. 新町遺跡出土鉄製品

8-6



9. 新町遺跡出土貨幣

8-7



8-8

長野県佐久市

岩村田遺跡群 新町遺跡 II

1987年1月

編集者 佐久埋蔵文化財調査センター

発行者 長野県佐久市教育委員会

印刷所 株式会社 佐久印刷所
